随想　美しくありたい女性の心理

～〝女性にはやはり愛が必要なのか？〟という記事を読んで～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

東京新聞の八面は全面広告のページである。そこに囲み記事で〝女性にはやはり愛が必要なのか？〟というものがあった。著者の目を引いたのは《やはり》と強調されていたためである。広告ではあるが共感するところもあり、以下に引用してみる。

昨今、女性が年上の年の差婚はやはり増えているように感じる。数年前の五〇代・四〇代・三〇代の有名女性タレントが若い一般男性と連続して結婚した、等のニュースがあったからだろうか。私達の間でも増えているように感じる。これらの年の差婚をしている女性達を見ると気付くことがある。それは「キレイになったな！　若くなったな!!」ということだ。これらの理は、まさか…

《若いエキスを吸い取る!?》

決してお相手の若い人のエキスを吸い取っているわけではなく…「強い愛」を感じることによって「美しく若く」なっているのではないかと思う。だからお相手が同世代だとしても強い愛を感じていれば自然とキレイになったり、スッキリ若くなったりするのかもしれない。しかし、年の差がある場合、やはり若い人は「愛」の量が多いからなのだろう。そしてとくに女性は不思議な生き物だ。その「愛」の影響がすぐ外見に出るように感じる。

《後略》

サラリーマン諸氏と接していて、定年（多くは六〇歳）前頃から、人によって随分雰囲気が変わってくる。

著者の研究所がサルモネラ・エントリティディス（ＳＥ）対策で、さまざまな生産要因（材料等）を大量・多数モニタリングしていた二〇年ほど前のこと、大手飼料会社とも近く語り合い、飼料の安全性を担保するためのモニタリング方法等を整合させていた。ある飼料メーカーの品質管理担当者・Ｘ氏とも具体的な方法論等で親しく相談していた。

それから数年して、情報確認のため彼の携帯電話へ連絡した時のことである。数回のコールでＸ氏が出たのであるが、声音で本人かどうかが確認できない。まるで《年寄》の声で、著者の名前を名乗っても、直ちに反応がない。いかにも「え～、誰だっけ？」という気配を感じる。しばらく話していて、Ｘ氏は著者のことを思い出されたようで、こう続けられた。

「私、一昨年定年退職しまして、当時のことは記憶が確かでないので…」

二年足らずで、数十年も務めた会社の業務の記憶が薄らいでいる、という現実に、《慄然とした》ことがある。

それから、一〇数年、毎年のように定年退職されるサラリーマン諸氏と接するが、当時と異なり多くは定年後も契約社員として同じ会社にとどまっておられる。それらの方々のその後の人生を遠めに見ていると、定年後もはつらつとしている人々と、活力を失い、ただ時間をつぶしている人に分かれているように感じられる。

著者は、定年前の方々に次のように語りかけるのを常としている。

「今五八歳（としましょう）ですか！　現在の日本人は男性の場合、八〇～八一歳ですね。八〇マイナス五八歳は二二年です。五八歳から二二年をさかのぼると三六歳。つまり、三〇歳から現在までの歴史と同じ期間が将来にあるのですよ!!これからどのように生きれば充実しているのか、真剣に考えないともったいない」

まさにそのとおりである。著者は三四歳でサラリーマンからこの道へ転進した。そして多くの方々の支えを基に、五〇歳から研究所の充実と国際的な研究論文の投稿等、積極的に続けている。まだまだ、新しい事象への興味は薄れることがない。

幸い、著者の研究所に努めてくれるスタッフは若い人が多い。二〇～三五歳までが中核として日夜データと格闘してくれ、彼ら・彼女らと野外で起きる事象を分析すべく、語り合うことが、著者の活力の源なのであろう。

先の記事に《愛が若さの根源》と語られていた。確かに、恋する女性はいきなり美しくなり、若さをみなぎらせる。女性とは《まか不思議》生き物であることはうなずける。

しかし、男女を問わず若さを充満させるための糧は愛・恋だけではあるまい。《生きている自分を満喫できる》ことこそ、若さを保つ秘訣であると信じる。

そうしてみると、最近の若者には《生きている自分を満喫できている》人が少なく感じられる。かつては、仕事に生きがいを感じられたが、今はなかなか仕事に生きがいを感じられないことも多いであろう。昔は多くの作業は人の手に掛かっていた。人の手でモノが生み出されていた、といってもよいだろう。しかし、現代の生産現場でひっきりなしに動いているのは（働いているのは）機械である。人はその機能をただ黙って見ているだけ…。

このようなシステムが必然となっている中で、働く人々が《仕事に充実感》を持てないのは、一面当たり前かもしれない。

しかし、過日おきたＪＲの新幹線インシデントは機械任せでは人命にかかわる事態を予見できず、万が一のケースでは取り返しがつかないことが起き得ることを身近に見せてくれた（このケースでは責任の多くはＪＲ西日本に帰せられるべきであろう。なぜなら、専門技師が間近なリスクを感知し上申しているにもかかわらず、上司が誤った指示をしていること、さらにはそのＪＲ西日本では福知山線の大事故を起こしているという苦い記憶があるのだから!!）。

著者は今、鶏糞処理に大いに興味を持っている。まさに、業界では嫌われ者の鶏糞であるが、携わると面白い。とても面白い。新たに気付いた事象を、鶏糞処理の担当スタッフに確認すると、さらに面白い情報を提供してくれる。担当者は知っているのである。組織（あるいはトップが）それを生かそうとしないから、情報は死に、スタッフは生きがいを失う。

老若男女を問わず、若く美しくあるために、生きがいを追いかけられる社会に作り戻さねばならないのではないか?!等と思いをはせる記事であった。

注：《ＪＲ西日本の福知山線脱線事故》二〇〇五年四月二十五日午前九時十八分頃に兵庫県尼崎、塚口駅から尼崎駅のカーブで快速列車の前五両が脱線し、内四両がオーバーラン。先頭二両が線路脇のマンションに激突した。先頭車両は一階駐車場へ突入、二両目はマンション外壁へ横から激突して、さらに脱線逸脱してきた三～四両目に挟まれて一～二両目は原形をとどめないほどに大破した。直接的な事故の被害者は死亡者一〇七名、負傷者五六二名におよぶ歴史的な大事故となった。